

表63 小松町自動車保有台数

年月日	区分		
	営業用	自家用	合計
S 51. 4. 1	86	1,863	1,949
S 63. 4. 1	144	2,436	2,580

西条県地方局調

種類	年月日	数	
		S 52. 8. 10 台数	S 63. 4. 1 台数
自家用	軽四自動車	1,093	310
	貨物 "		2,024
営業用貨物自動車		—	1
オートバイ	原付	1,485	1,509
	90cc	—	411
	125cc	19	56
	200cc	22	87
	250cc	—	66
農耕トラクター		106	42
フォークリフト		6	9

小松町役場調

備考 営業用自動車にはバス（観光、路線）、トラック、特殊車が含まれる。
自家用には普通車、小型車、トラック等を含む。

を保有するというのが実態である。

表63は小松町自動車保有台数について昭和五一年四月一日と昭和六三年四月一日における実数を示したものである。共に自家用車が九四%以上を占めている。

3 鉄 道

(一) 讚 岐 線 (予讚線)

我が国に初めて東京—横浜間に鉄道が敷かれたのは明治五年（一八七二）である。

四国における国有鉄道の始まりは、明治二九年一二月の山陽鉄道買収による高松—琴平間であったから中央に遅れること二四年である。
明治四五年四月に鉄道院多度津建設事務所が設置された。

多度津以西は明治二五年六月公布された鉄道敷設法によると、四国予定線の一つ香川県下多度津より愛媛県下今治を経て松山にいたる鉄道として決定されていた。

多度津—松山間の鉄道敷設に関する建議案は、明治四四年四月衆議院において可決され、翌年法律第二号で多度

津——川之江間が第一期に加えられ、大正元年（一九一二）から五年にいたる五か年継続事業（予算二〇万円）で着工される運びとなり多度津線として、大正元年一月多度津——観音寺間を起工し、翌二年二月開通。次いで五年四月、観音寺——川之江間が開通した。これが四国で最初の官設鉄道となったのである。建設費は一六五万円に達した。

次いで西条線（川之江——伊予西条間）は大正四年法律第二七号で第一期線に加えられ、翌五年五月川之江——伊予三島間を起工し、翌六年九月に開通、更に八年九月、伊予三島——伊予土居町、大正一〇年六月、伊予土居——伊予西条間が開通した。建設費は約三二四万円に上った。

次に松山線（伊予西条——松山間）は大正七年法律第二二号で鉄道敷設法中の第一期線に編入され、翌八年三月伊予西条——壬生川間の実測に着手翌九年一月より工事に着手した。

なお、この間、従来の讃岐線は大正一二年一月月讀予線と改称されたが、昭和五年（一九三〇）四月に現在の予讃線と改められた。

表64 予讃線各駅開業年表

駅名	開業年月日	摘要
高松	明三〇・二・二二	買収
丸亀	〃二二・五・二三	同
多度津	大二・二・二〇	同
川之江	大五・四・一	
伊予三島	大六・九・一六	
伊予土居	大八・九・一	
多喜浜	大一〇・六・二二	
新居浜	〃	
中萩	大一〇・九・二二	
伊予西条	大一〇・六・二二	
石鎚山	昭四・七・二	
伊予永見	昭三六・六・一	
伊予小松	大一二・五・一	
玉之江	昭三九・二・一	
壬生川	大一二・五・一	

表64は予讃線各駅の開業年表である。

伊予三芳	大二・一〇・一	
伊予桜井	大二・二・二二	
伊予富田	大二三・二・一一	
今治	大二三・二・一一	
波止浜	大二三・二・一一	
松山	昭二・四・三	
伊予大洲	大七・二・二四	買収
八幡浜	昭一四・二・一六	昭八・一〇・一
宇和島	大三・一〇・一八	買収
		昭八・八・一

(二) 伊予小松駅開通

大正一二年（一九二三）五月一日、伊予西条——壬生川間が開通し、待望の列車が小松駅に到着するや町民は万歳を連呼して祝賀した。

伊予小松駅誘致にあたっては、地元の有志はもろんのこと河上哲太の努力に負うところが大きかった。

この伊予小松駅の開通により、今日の小松駅前通り商店街が生まれ郡内の交通体系はもろん、産業経済に大きな変革をもたらし、以後陸上交通の中心的な役割を果たした。

初代駅長には細谷剛一が任命された。



旧伊予小松駅

(三) 戦後の鉄道輸送

昭和二〇年、伊予小松駅の職員は、駅長以下二四名という人員で旅客、手荷物、貨物、小荷物、踏切の各係を担当して輸送業務にあっていた。

都市の復興に、農村から農産物の輸送に鉄道の役割は大きかった。

特に、石鎚登山の玄関駅であった伊予小松駅の昇降信者数は多く、夏季大祭の一〇日間だけでも延べ一〇万人に達したという。また、

四国第六十一番香園寺の春秋の縁日には大勢の信者が昇降したため、他駅から応援を仰いで処理していた。

昭和三五年には、「安くて、速く、待たずに乗る」という条件を満たす気動車「ジーゼルカー」による列車が増発され、蒸気機関車が姿を消した。

昭和三六年四月に急行一往復を新設、準急行は三往復か